

## 「的」付きナ形容詞の統語機能に関して

王 娟

### 1 はじめに

曹・仁科(2006)は、中級程度の中国人日本語学習者の大量の作文データを利用して、学習者の形容詞及び形容動詞を含む共起表現の習得状況及び問題点を解明した。誤用を起こす形容動詞には中級以上の漢字形容動詞が多いことが分かった。その中の四分の一近くの誤用は、すべて「的」付きナ形容詞と非「的」ナ形容詞<sup>1</sup>の使用に関連する問題である。「『的』語の過剰使用及び創作、『な』『の』の接辞の選択誤りのような誤用タイプDも二級以上の誤用フレーズに多く存在している」と曹・仁科(2006)は指摘している。

つまり、接尾辞「的」の使用は、中国人日本語学習者にとって避けられない一つの難点と言っても過言ではないと考えられる。一方、現在、中国の日本語教育現場で使われている日本語教材を調べてみると、『日語』<sup>2</sup>、『大学日語』<sup>3</sup>、『中級日本語』<sup>4</sup>は、日本語の接尾辞「的」についての説明はない。説明のある教材の四書<sup>5</sup>は、「的」を語基と一緒に教えられるのではなく、接尾辞として単独で取り上げて、その意味を分類して説明している。しかし、「的」付きナ形容詞の実際の使用特徴については、明示していない。従って、中国人日本語学習者は、上述の文法知識で「的」付きナ形容詞の統語機能に関して把握するのは難しい。そのため、実際に「的」付きナ形容詞を使用する場合、たくさんの誤用が発生すると考えられる。

本稿は、語基部分だけでなく、後の後続部分も含んで「的」付きナ形容詞の統語的な機能と使用特徴について使用実態を分析し、中国人日本語学習者に「的」を習得する時有益な手掛かりを提示することを目的としている。説明しやすいように、本稿では、「(前) 的 (な/に…) (後)」の構造には、(前)の部分を「語基部分」と称して、(後)の部分を「後続部分」と称することにする。

### 2 先行研究

日本語の接尾辞「的」に関する先行研究は、主に次のような視点から調査と考察が行われた。

①藤居(1957)と藤居(1961)は、接尾辞「的」の曖昧さ、無規則性及び濫用されてい

る現象について検討している。

②山田(1961)、原(1986)と堀口(1992)は、接尾辞「的」の歴史的な発生について述べている。

③接尾辞「的」の意味と用法について、遠藤(1984)と原(1986)は、意味論の視点から語基の意味的特徴及び「的」が表す意味を述べている。加納(1991)は、品詞論の視点から語基について分類を行った。

④他の言語との対照比較は、次のようである。遠藤(1984)と原(1986)は、日中対照の視点から考察を行った。藤居(1961)は、英語の訳文に使われている「的」のはたらきについて言及している。それ以外に、韓国語との対照は、朴(2000)がある。

⑤使用の実態調査としては、90年代に入って盛んになった。南雲(1994)、丸山(1997)、山下(1999)などがある。これらは主に計量的調査であった。

また、この中に、遠藤(1984)は、「的」のつく派生語の使われ方について述べているが、主に「～的+体言」、「～的な+体言」、「～的+用言」の三種類の使われ方について、一般ナ形容詞との違いを述べている。接尾辞「的」の統語的な特徴及び機能に関しては、十分に説明しているとは言えないと思われる。他には、羅(2003)が、ナ形容詞に後続する「～な」「～に」「～で」「～だ」などの使用実態について計量的調査と分類を行った。しかし、羅(2003)の調査対象は、『全国語学教育学会山口支部研究紀要』第6号である。同紀要の文章は、主に日本語教育・日本事情教育などに関する論文、研究ノートである。日常的な日本語の使用実態を反映することは難しいと考えられる。

以上の先行研究では、さまざまな分析や分類が示されていて、とても参考になる。しかし、今までの先行研究には、考察対象が、ほとんど接尾辞「的」に前接する語基部分に集中しており、「的」付きナ形容詞の統語的な特徴及び機能に関しては、十分に説明されていない。

### 3 調査対象

本稿の調査対象は、朝日新聞東京本社発行の朝刊のオピニオン2の投書欄「声」(以下、「声」と略す)を使用する。その理由は、以下の二点が考えられる。

①「声」投書欄の投書者は、年齢が十代から九十代にわたって、職業も主婦、学生、教師、会社員などを含めて、老若男女を問わず、地域の制限もない。「声」は、現代日本語の言葉遣いを調査するデータベースとして、代表性があると考えられる。

②「声」投書欄の内容は、政治、経済、生活、文化などを含めて、研究データとして、現代日本語の一般使用状況を反映していると言えるであろう。

さらに、本稿は、接尾辞「的」の統語的な機能と使用特徴を全面的に把握するように、共時的視点だけでなく、通時的な視点も取り入れて分析を進めていきたいと考えている。ゆえに、調査対象の期間を選ぶ時、1995年1月分、2001年1月分と2007年1月分の三

ヶ月分の「声」を分析対象にして、調査を進めていくことにする。

## 4 調査と考察

### 4-1 使用表現の種類

まず、1995年1月分、2001年1月分と2007年1月分の三ヶ月分の「声」から接尾辞「的」に関する表現を調べると、それぞれ150例、100例と76例を収集した。その326例は、主に「的な」、「的 〇」、「的に」、「的だ」、「的で」、「的と」、「的らしい」、「的って」、「的かどうか」のような九種類の表現に分類することができる。具体的に次のようになる。

①「語基部分+的な+後続部分」(本稿では「的な」と略す)：

例：大手私鉄や営団地下鉄が運賃値上げ申請の方針を決めたというが、こんどこそ公聴会などで徹底的な議論をしてもらいたいものだ。(1995.1.10)<sup>6</sup>

②「語基部分+的 〇+後続部分」(本稿では「的 〇」に略す)：

例：「憲法9条を見直し、集团的自衛権を行使できるようにすべきだ」と論じている。(2007.1.7)

③「語基部分+的に(は/も)+後続部分」(本稿では「的に」と略す)：

例：世界的に珍しい、貴重な動物が多く生息していることを、改めて感じました。(2001.1.26)

④「語基部分+的だ/だった(+後続部分)」(本稿では「的だ」と略す)：

例：“貢ぎ物”の発想よりはるかに効果的だと思うのだが。(1995.1.19)

⑤「語基部分+的で/である/であった/であり/でした/ではない」(+後続部分)

(本稿では「的で」と略す)：

例：あまりに管理的で、どこかおかしい。(2007.1.26)

⑥「語基+的と/とは/というか+後続部分」(本稿では「的と」と略す)：

例：スポーツ紙ですら連日のように政治を取り上げるのですから、若者といえども政治に消極的とはいえ関心を持っていることは間違いありません。(1995.1.31)

⑦「語基+的らしい(+後続部分)」(本稿では「的らしい」と略す)：

例：彼らいわく、ドイツでは他人と目が合っても気づかないふりをして目線をそらすのが一般的らしい。(2007.1.1)

⑧「語基+的かどうか(も)(+後続部分)」(本稿では「的かどうか」と略す)：

例：「ローマ字化」そのものが効率的かどうかとも問題だ。(1995.1.8)

⑨「語基+的って(+後続部分)」(本稿では「的って」と略す)：

例：「政治的」ってなんだろう。(2007.1.19)

この九種類の表現に関する述べ語数<sup>7</sup>については、次の表1にまとめている。

表1

	1995年1月	2001年1月	2007年1月	合計
①「的な」	45	32	28	105
②「的∅」	46	19	14	79
③「的に」	47	43	25	115
④「的だ」	5	2	1	8
⑤「的で」	5	3	5	13
⑥「的と」	1	1	1	3
⑦「的らしい」	0	0	1	1
⑧「的かどうか」	1	0	0	1
⑨「的って」	0	0	1	1
合計	150	100	76	326

表1から分かるように、「的な」「的∅」と「的に」この三種類の表現が多く使用されている。接尾辞「的」の実際の使用の9割以上にもなる。次の節から、まずこの三種類の表現に注目して考察していきたいと思う。

#### 4-2 「的な」

まず、後続部分を修飾する時、語基の部分には、「歴史的な努力」のような一つの単語を使用する単純な場合と「社会的・経済的な性差」（「A 的・B 的な C」）のような複数の単語を使用する場合がある。複数の場合は、単語と単語の間に「・」や「、」という符号を使うこともある。さらに、複数の場合には、「的」の後ろの「な」を基本的に繰り返して使用せず、最後の単語の「な」だけを残すか、それとも全部の単語の「な」を省略する（つまり「的∅」の表現になる）。しかし、次のような例（「A 的な B 的 C」）もある。

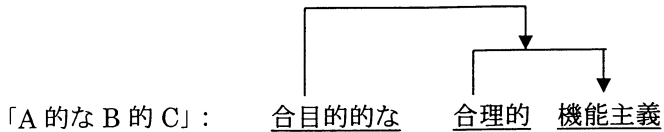
例：日本の政治システムは、合目的的な合理的機能主義を欠いている（縦割り行政）。

（1995.1.21）

「A 的・B 的な C」のような表現は、構造から考えると A と B はそれぞれ C を修飾するのである。「A 的・B 的な C」は「A 的な C」と「B 的な C」の複合した言い方だと考えられる。つまり、「社会的・経済的な性差」は「『社会的な性差』＋『経済的な性差』」である。もっと簡略な言い方をすれば、A の「的」を省略して、「A・B 的（な）C」になるだろう。例えば、「社会・経済的な性差」。さらに、「A 的・B 的な C」の「A」と「B」の関係は並列的に並べる対応関係が多いことはデータから分かった。例えば、「社会的・経済的な性差」「精神的・肉体的な状態」「歴史的、現実的な視点」などがある。

一方、「A 的な B 的 C」の場合、「B 的 C」はまずひとまとめにして「A 的な」の修飾する「名詞」になる。このような表現は、前の単語の「な」はだいたい省略せず、次の単語との間には符号を使わないことである。データから分かるように、「A 的な B 的 C」のような表現は、「A 的・B 的な C」のような表現より使用率が随分低い。今回のデータからた

だ2例を採集した。それぞれの構造の図解は、次のようになる。



また語基の部分には、文を使う場合もある。文の場合は、引用の符号「」を使うことがある。この場合、語基の部分と後接する接尾辞「的」との関係を、山下（2000）は「引用」と捉える。その語基の文の部分には、ことわざ・慣用句、スローガン・コピー、決まり文句、発話・思考内容などの表現が見られると山下は指摘した。また、この表現に関しては、奥秋（1999）は、「文や句をひとまとめにして体言扱いする用い方」だと記述している。例は、次のようになる。

例：そう考えれば、21日のおわび放送も、キー局のフジテレビが謝罪会見をすべきなのに、  
「関西テレビがやったことだ」的な対応だ。 (2007.1.27)

次に後続部分に関しては、まず一番多いのが、一つの単語で表現することである。他には、「の」、「や」のような格助詞や「、」などの符号を使うフレーズもある。例えば：

例：とかく経済的なことや肩書が先行しがちな男からは思いもしないところに目が行き届いているのです。 (2001.1.31)

また、後続の部分には、「理想的なの（は）」のように具体的な名詞の代わりに準体助詞の「の」を使う表現も見られる。

#### 4-3 「的」

この種類の表現は、単に「的な」の「な」の欠落と見られる先行研究もあるが、使用の面にも意味表現の面にも「的な」と違う特徴を持っていることがあるから、本稿では、「的な」と区別して、新たな分類にする。

まず、「的」の統語的な機能から見ると、基本的に「的な」と「的に」のどちらに置き換えることができるかによって二種類に分類することができる。つまり、後続部分は、体言であるかそれとも用言であるかの違いだと考えてもいいだろう。次の例1は、「的な」に置き換えることができる。この種類の例は、全部で73がある。圧倒的に多い。また、次の例2は、「的に」に置き換えることができる。この種類の例は、全部で5例である。比率としては、とても少ない。最後の例3は、曖昧なところがあって、「的な」と「的に」のどちらにも置き換えることができると考えられる。「的な」に置き換えると考えた場合、「具体的」は、後の「要望」に関わって「具体的な要望」と受け取ることができる。一方、「的に」

に置き換えると考える場合、「具体的」は、後の「行わねば」に関わって「具体的に…行わねば」と受け取ることもできる。しかし、この種類の例は、とても少ない。今回のデータには、この1例しかなかった。

例1：「神州天馬侠」「雪の渡り鳥」等、弁士の七色の声はさえ、多少の雨では動じぬほど夢中になり、露天の映画館を毎晩満杯にし、まるで昭和初期にタイムスリップしたかのような爆発的人気を博していた。(1995.1.3)

例2：日本も同様だろうが、彼らの幻想を壊さぬよう「知らない人に微笑むことはないけれど、既知の人に対しては比較的親切かも」と答える。(2007.1.1)

例3：むろん行政にも具体的要望を行わねば、進展はない。(1995.1.12)

次に、語基の部分に関しては、データから分かるように一つの単語を使う表現が一番多い。また、二つの「的 0」を重ねて表現する方法と、前の「的」を省略する表現がある。重ねて表現する時、「人的、物的損害」のように二つの単語の間に「,」「・」の符号を使うことがある。

さらに、データから分かるように、「的 0」類には、「公的機関」のような語基が漢字一字である例が全部で21例ある。「的 0」類の四割以上にもなる。この高い比率は、「的な」などの他の表現種類には見られない。しかし、この21の例文をまとめて見ると、異なり語数は5しかない。「公(的)」、「人(的)」、「知(的)」、「私(的)」、「物(的)」である。つまり、この五つの語基が繰り返し使用されているのである。この五つの語基は、全て造語成分で、単独では使えないのである。この表現について、吉村(1987)には、「長い要素につくのが接辞的用法、短い要素につくのが結合用法というわけである。この基準に従うと、『現実的、反抗的、感情的』の『的』は接辞的用法となり、『劇的、私的、知的』の『的』は結合用法に分類される」のように述べている。つまり、「公的、人的、知的」などの表現は、語彙化して使用されているのではないだろうか。語彙化すれば助動詞の「な」が欠落して、もっと簡潔的な表現も使用しやすいと予測できる。

さらに、「的 0」を「的な」に置き換えることは基本的には問題なくできる。逆に言うと、「的な」の表現を「的 0」に置き換えることも基本的には問題なくできる。しかし、置き換えにくい用例もある。例えば、「～的なもの」と「～的なこと」の言い方があるが、「～的 0もの」「～的 0こと」は言いにくい。つまり、「的 0」類の表現は、「こと」や「もの」のような形式名詞との相性が悪いと考えてもいいだろう。一方、「的な」類は、この特徴がないと考えられる。時枝(1950)には、形式名詞について次のような記述がある：

「これらの語(形式名詞)が表現する概念内容が漠然としてあるといふ点で、接尾語と極めて近いのであるが、異なるところは、接尾語は、他の語と結合して一の複合語を構成することが出来るのに対して、形式名詞は、他の語に対する接続の関係は、独立した名詞と同じやうに用ゐられるが、それだけで独立して用ゐられることがないといふことである。」

「的 〇」の使い方には、語基が漢字一字である場合だけでなく、二字の場合も「的な」の使い方より語彙化するイメージが強いと言えるであろう。まさに、「的 〇」のこの「語彙化」の特徴は、形式名詞の「他の語に対する接続の関係は、独立した名詞と同じやうに用ゐられる」という特性と相性が悪いのではないかと考えられる。準体助詞の「の」の場合も同じである。「の」は形式名詞に入れられる説は少なくない。「の」の特性は、「こと」や「もの」などの他の形式名詞と近似している。「理想的的」のような「的 〇」の使い方は日本人にとって違和感が感じられる。

しかし、文章や新聞ではほとんど見当たらない「～的 〇+形式名詞」の言い方は、インターネットではしばしば出てくる。2007年7月5日 <http://www.google.com/intl/ja/> で検索した結果、三十以上の例も収集できた。例えば：

\* 政府の実行していることは、ここ数年にない画期的ことばかりである。

\* 特に靴の先の尖った先端にある小さな花の刺繍と、足に被さる前面の目立つ部分の、蝶のようにみえる艶やかな刺繍は非常に印象的のものであった。

\* 面白さにこだわるゲーム作りが理想的のは分かりますが、だからといって会社の意向に沿うビジネス優先での制作が悪いというわけではなく、彼には彼の考えがある。このあたりの描写が素晴らしい。

言葉は生き物であるから、間違った語やフレーズでも、使ううちにそれが定着してしまうことはよくある。「僕的には」はその一つだと考えてもよいだろう。

#### 4-4 「的に」

「的に」の表現は、取立て助詞の「は」、「も」と「しか」を伴うことがある。例えば：  
例：JR東日本は、重大事故を未然に防ぐ安全対策と増発サービスが、結果的には電車をよく止める要因になっていると答えている。 (2001.1.20)

また、後続部分から見ると、「動詞」、「形容詞・ナ形容詞」と「助動詞」の三種類に分類することができる。「動詞」である種類は、一番多く、全部で100ある。しかし、同じ「動詞」と言っても、統語的に違う場合がある。下の例で考えてみよう。

例4：実際に、多くの国民の反対や不安のなかで政府はコメの輸入を計画的にことしから始める。 (1995.1.28)

例5：今のままだと来年の戦後五十一年以後は、マスコミからも見放されて、いよいよ戦争の記憶の風化が加速度的になる恐れがある。 (1995.1.14)

まず、例4の場合は、「計画」という語基が、接尾辞「的」と格助詞の「に」を伴って、後の動詞「始める」の方式、方法を表す。「計画的」は副詞として「始める」の補語になると考えてもいいだろう。一方、例5の場合は、「加速度的」がむしろ「加速度的であること」のように、一つのかたまりや概念として、後の「になる」の結果になると考える方がいいだろう。この場合、「加速度的になる」は、「病気になる」と同質のものと考えられ

る。言い換えれば、「変化の結果が加速度的である」ということになる。つまり、この場合の「加速度的」は、副詞よりむしろ名詞、補語よりむしろ目的語と考えるほうがよいと思われる。この「なる」という動詞の例は、今回のデータから3例を集まった。また次の2例も同じであると考えられる。

例：ふつうの暮らしをしている彼女の住まいは、外見はのっぺらぼうの箱形だが、内部の台所、洗濯室、車庫と続く部分は、実に機能的に造られていた。(1995.1.5)

例：今まで各地で数々の災害があったが、私にはひとごとと思え、募金活動やチャリティーは偽善的にしか感じられなかった。(1995.1.27)

このタイプには、「カワル、スル、カエル」のような「変化」を表す動詞や「見える」「聞こえる」などの「感知」を表わす動詞も当然考えられるところだが、今回集めた用例の範囲では見当たらなかった。

次に、「形容詞・ナ形容詞」をみる。収集した例は、全部で11がある。その中に、形容詞は9例で、ナ形容詞は2例しかなかった。例えば：

例：もちろんまじめに、親身に仕事をしているヘルパーさんが圧倒的に多いとは思うが。(2001.1.15)

例：表面的には豊かでも、水面下では人の身も心も蝕（むしば）む社会にはなあってほしくない。(2007.1.29)

最後に、「でした、であっても、ではないか、である」などのような助動詞を修飾する種類である。この種類は、数として少なく、全部で4例しかなかった。例えば：

例：私が出産した産婦人科は、基本的には母子別室でした。(2001.1.20)

以上の使用面の傾向は、接尾辞「的」の特徴だけではなく、ナ形容詞全体の特徴と関係があるかどうかについて、さらに調査を行う必要があると考えている。

#### 4-5 その他

以上の三種類の他には、「的だ」、「的で」、「的と」、「的らしい」、「的って」、「的かどうか」の6種類があるが、使用率はより低い。その中に、「的で」類の「である、であり、でした、ではない、で」及び「的だ」類の「的だ、的だった」などは、すべて「的だ」の活用形だと考えられる。また、「的と」類と「的って」類は、引用を表す表現だと考えられる。「的らしい」類と「的かどうか」類も、各1例を採集した。

ここで注目したいのは、「な」の「過去」「断定」などのテンスを担う役である。「な」は述語を成り立たせる「だ」の活用形であるから、テンスを担う役もすることができると、寺村(1991)は指摘している。この特徴に関しては、寺村(1991)には「ただの『～ナ』の形からは、とくに過去に対する現在という意味はほとんど感じられないのがふつうである」という説明がある。次の例を見てみる。

例：当時はフルブライト以外にほとんど留学できない時代で、進歩的だったはずの父



は「オマエはだまされている」と反対したが、彼の家族は快く受け入れてくれた。

(1995.1.4)

例：学生の坊主頭、学生服、学帽など、画一的である社会は、だれかと違うことが目立ってしまう。

(1995.1.6)

「進歩的だった～父」となると、「進歩的な父」に対する「過去」というテンスが感じられる。「画一的である社会」となると、「画一的な社会」に対する「断定」というテンスが感じられる。

## 5 まとめ

本稿は、日本語の接尾辞「的」の使用実態を巡って、「的」の統語的な機能及び使用特徴を考察してみた。調査対象は、朝日新聞の投書欄「声」で、通時的な視点と共時的な視点で分析を進めてきた。分析を通して明らかになったことをまとめると以下ようになる。

接尾辞「的」の使用は、多様であるが、「的な」「的 〇」と「的に」の三種類は極めて多く使用されている。語基部分に複数の単語がある場合、「的」と「な」の省略方法によって表現する意味も変わってくる。また、「的 〇」類は、語基が漢字一字である場合に多く使われていて、その語基は集中している。語基が漢字一字である場合だけでなく、二字の場合も「的な」類より語彙化のイメージが強いと考えられる。この特徴のため、「的 〇」類は形式名詞と共起しない傾向がある。さらに、「的に」類は、「変化」や「感知」を表す動詞と共起する時、統語的な意味上他の動詞と異なって、後続部分にとって語基部分は副詞よりむしろ名詞、補語よりむしろ目的語と考える方がよいと思われる。最後に、「な」の活用によってテンスを表現することができることも分かってきた。

以上のように明らかになった「的」に関する統語的な特徴は、今までの先行研究は言及していないが、日本語学習者が「的」を使用する時もっと豊かな表現ができるように欠かせない知識であって、「的」の意味と使用を説明する時日本語学習者に明示する必要があると考えられる。

## 後注

- 1、王・曲・林(2001)では、「社会(的な)、個人(的な)、合理(的な)」のような語彙を「的」付きナ形容詞と、「簡単(な)、便利(な)、有名(な)」のような語彙を非「的」ナ形容詞と定義した。本稿は、その定義に従って分析を進めていくこととする。
- 2、上海外語教育出版社が1986年出版したもの。
- 3、高等教育出版社が1992年出版したもの。
- 4、東京外国語大学留学生日本語教育センターが編集、凡人社が1994年出版したもの。
- 5、上海訳文出版社が1981年出版した『日語』、人民教育出版社が1990年出版した『標準日本語』、海洋出版社が1993年出版した『日本語教程』と上海外語教育出版社が1994年出版した『新編日語』。
- 6、1995年1月10日の「声」から取り上げた例。

7、語基部分には、もし複数の「的」がある場合、分類する時、最後の「的」の表現形によるのである。例えば、「合目的な合理的機能主義」のような表現は、「合理的」によって、「的」類に分類する。詳しい説明は、後節の分析に参照されたい。

## 参考文献

- 曹紅荃・仁科喜久子（2006）「中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言—名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について—」『日本語教育』130号
- 王娟・曲志強・林伸一（2001）『『的』付きナ形容詞と非『的』ナ形容詞の分類と意味的特徴』山口国文第24号 山口大学人文学部国語国文学会
- 藤居信雄（1961）「的の意味」『言語生活』119号 筑摩書房
- 遠藤織枝（1984）「接尾辞『的』の意味と用法」『日本語教育』53
- 原由起子（1986）「-的 —中国語との比較から—」『日本語学』5・3 明治書院
- 藤居信雄（1957）「的ということば」『言語生活』71号 筑摩書房
- 山田巖（1961）「発生期における的ということば」『言語生活』120号 筑摩書房
- 堀口和吉（1992）「助辞『～的』の受容」『山辺道』36 天理大学国文学研究室
- 加納千恵子（1991）「漢字の接辞的用法に関する一考察（4）—A J N化機能をもつ漢字について—」『文芸言語研究 言語篇』20 筑波大学言語・文芸学系
- 朴大王（2000）「接尾辞『的』について—話し言葉における『的』を中心に—」『言葉と文化』創刊号 名古屋大学・国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 南雲千歌（1994）「現代日本語の『～的』について—雑誌『中央公論』1992年11月号の場合—」『ICU日本語教育研究センター紀要』3 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 丸山千歌（1997）「英語の接尾辞“-tic”の訳語『～的』について—『中央公論』1962年11月号の場合—」『ICU日本語教育研究センター紀要』6 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 山下喜代（1999）「字音接尾辞『的』について」『森田良行教授古希記念論文集』明治書院
- 羅（2003）「非『的』ナ形容詞と『的』付きナ形容詞の文章中での使用特徴の比較：ナ形容詞の後続パタンの視点から」山口国文第26号 山口大学人文学部国語国文学会
- 山下喜代（2000）「漢語系接尾辞の語形成と助辞化—『的』を中心に—」『日本語学』19・3 明治書院
- 奥秋義信（1999）「そこが知りたい日本語教育なんでも相談」『月刊日本語』11月刊アルク
- 吉村弓子（1987）「漢字の読み分けにあらわれる統語機能」『日本語学』1987 vol.6 8月号 第六巻第八号
- 時枝誠記（1950）『日本文法 口語篇』岩波全書
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 第三巻』くろしお出版